

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380436

研究課題名(和文)18世紀カタルーニャ綿業にとっての捺染亜麻布と植民地産綿花

研究課題名(英文)Printed linen and American raw cotton for the 18th century Catalan Cotton Industry

研究代表者

奥野 良知 (OKUNO, Yoshitomo)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：20347389

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：1780年代に成立したカタルーニャ綿業の流通生産構造は、シュレーゲン等から輸入された亜麻布がバルセローナの更紗製造企業で捺染された後にスペイン領アメリカ植民地へ輸出され、その対価として植民地から綿花が輸入され、その綿花で作られた更紗が国内市場で販売されるというものだった。これは、「亜麻布」という「ヨーロッパ在来の古い物産」に「捺染」という「ヨーロッパにとっての新しい技術」を施した捺染亜麻布を植民地へ輸出し、その対価として「長繊維のアメリカ綿」という「ヨーロッパにとっての新しい材料」を輸入することで、マルタ綿糸という「相対的に古い材料」から脱却していったと解釈できるということを示した。

研究成果の概要(英文)：The commercial and productive structure of the 1780s Catalan cotton industry was as follows. A large amount of white linen cloth produced in Silesian and northern France were imported into Barcelona, where they were printed in calicoes factories and re-exported to Spanish America. In exchange for the export of this printed linen, raw cotton (American cotton) was imported from Spanish America, and printed calicoes made of this material were principally consumed in the Spanish market.

Using historical documentations, our investigation clarified that this structure can be interpreted as follows. Export printed linen to Spanish America and import raw cotton meant that export "a European old product (linen cloth)" decorated with a "new technology for Europe (printing)", and import "a new material for the Europe" which has a long fiber, that is American cotton. With this new material, Catalan manufacturers could be liberated from the domination of "a relatively old material (Maltese yarn)".

研究分野：カタルーニャ経済史

キーワード：カタルーニャ 綿業 綿工業 捺染 更紗 綿花 亜麻布 バルセロナ

1. 研究開始当初の背景

(1) バルセローナを中心都市とするカタルーニャは、18世紀末から19世紀前半にかけて、綿業を主導部門とする産業革命がスペインで唯一生じた地域であり、工業化が必ずしも国家単位ではなくむしろ地域単位で生じた現象であることを明瞭に示している事例といえる。同地は現在もスペインのGDPの約20%を占め、スペイン経済のエンジンと呼ばれている。また、スペイン経済の中心地であると同時に、独自の言語・文化・メンタリティー・アイデンティティを持つ地域でもあり、近年は、スペインによる同化政策や財政政策に反発して、独立運動が盛んになっている。

(2) そもそもヨーロッパの綿工業というのは、17・18世紀のヨーロッパで爆発的に流行したインド産を中心とするアジア産更紗(様々な文様に染色された綿布)の輸入代替産業として生じたものであり、いわゆる産業革命とは、アジアの風土のなかで育まれた高度に熟練を必要とするアジア産更紗を輸入代替するために行われた創意工夫から生じた技術や生産組織一連の革新に端を発するものである。カタルーニャ綿業もこのようなヨーロッパ綿業の一つとして誕生し、カタルーニャの産業革命で主導的役割を演じることになるのだが、そのカタルーニャ綿業は、18世紀においては次のようないくつかの興味深い特徴を有していた。

18世紀初頭にバルセローナで誕生したカタルーニャ綿業では、更紗(捺染綿布)製造企業がマルタ綿糸(レヴァント綿糸の一種)を用いて純綿布の更紗を製造し国内市場に販売していた。

1780年代に入ると、カタルーニャ産葡萄蒸留酒をオランダ等に輸出した対価としてシュレーゼン等から輸入された亜麻布がバルセローナの更紗製造企業で捺染された後にスペイン領アメリカ植民地へ輸出され、その対価として今度は植民地から綿花が輸入され、その綿花で作られた更紗が国内市場で販売されるという流通生産構造が成立した。これにより、カタルーニャ綿業では、マルタ商人が独占的に供給するマルタ綿糸からの脱却が可能になった。植民地綿(アメリカ綿)で織られた綿布も、それが紡車によるものであると機械によるものであると純綿布だった。ちなみにカタルーニャでは1784年にジェニー紡績機が、92年にアークライト水力紡績機が導入されている。

2. 研究の目的

しかし上記の説明をもってしても、1) 植民地へ輸出されていた捺染亜麻布とは何だったのか、2) その植民地への輸出は、どの程度に植民地産綿花の輸入を意図したものだったのか、3) マルタ綿糸への依存からの脱却は、なぜレヴァント綿ではなく植民地産綿花(アメリカ綿)である必要があったのか、

というような疑問が残る。

他方、鈴木良隆氏は、短繊維のアジア綿(レヴァント綿も含まれる)では経糸用綿糸の紡績に高度な熟練が必要とされたが、長繊維のアメリカ綿を用いることで、ヨーロッパでも在来の技術(紡車)を用いた純綿布の生産が、アークライトの水力紡績機以前にすでに可能となったという問題提起をしている。

そこで、鈴木氏の見解をカタルーニャに当てはめると、1780年代に成立した同綿業の流通生産構造とは、「亜麻布」という「ヨーロッパ在来の古い物産」に「捺染」という「ヨーロッパにとっての新しい技術」を施した捺染亜麻布を植民地へ輸出し、その対価として「長繊維のアメリカ綿」という「ヨーロッパにとっての新しい材料」を輸入することで、マルタ綿糸という「相対的に古い材料」からの脱却を目指したのではないか、という仮説を立てることができる。この仮説を検証することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

カタルーニャ州立図書館に所蔵されている、バルセローナの更紗製造企業の企業者団体だったバルセローナ紡績会社関係の文書、18世紀末～19世紀初頭にかけてバルセローナで最大の規模の更紗製造企業だったゴニマ社の文書、18世紀半ばの同地の代表的更紗製造企業だったアレグラ社の史料を含むカスターレット文書、カタルーニャ公文書館に所蔵されている18世紀末～19世紀初頭にかけてバルセローナで最も重要な更紗製造企業の一つだったカスターニエー社の文書(販売台帳や書簡)などを用いて、先に記した仮説を検証する手がかりを探った。また、バルセローナの諸大学の研究者との情報交換を行った。

4. 研究成果

(1) 捺染亜麻布とは何だったのか、という点について

織物への捺染というのは、大まかに言うと、本来は17・18世紀のヨーロッパにとっての「新物産」だった捺染綿布(=ヨーロッパ産模造更紗)に施されていた仕上げ技術だった。「新物産」だったというのは、以下の諸点においてである。そもそも、着心地が良く洗濯も容易な綿布そのものが17・18世紀のヨーロッパにとっては新物産だった。綿布は更紗(様々な文様に染色された綿布)という形で17・18世紀のヨーロッパにアジアからもたらされたのだが、インド産を中心とするアジア産更紗には、ヨーロッパ人の舶来趣味を満足させるエキゾチックな文様が施されていたため、着心地のよさと相まって、爆発的な消費ブームをもたらした。インド産更紗は高度な熟練を必要とする手染めにより仕上げられていたのだが、ヨーロッパで模造生産された更紗では手染めではなく捺染が施されていて、この、織物に捺染を施すというこ

とが、大雑把に言うところまたヨーロッパにおいては「新しい」出来事だった。

従って捺染亜麻布というのは、捺染綿布（ヨーロッパ産模造更紗）というヨーロッパにとっての「新物産」に施されていた基本的には「新しい仕上げ技術」である捺染を、亜麻布という「ヨーロッパにとっての在来の古い物産」に施した商品であるといえる。本来は綿布に施すための仕上げ技法だったため、それを亜麻布へ施すに際しては、初期の段階では色々として試行錯誤があったことが史料から分かる。例えば、バルセロナで亜麻布へ捺染が始まった 1760 年代半ば、当時の代表的更紗製造企業のアレーグラ社の書簡には、亜麻布に赤色が定着しづらく、更紗製造業者たちが悪戦苦闘している様子が次のように描かれている。「それら[の捺染亜麻布]は、その美しさゆえに売れる見込みはあるものの、少し洗っただけで肉色〔赤色的一种〕が痩せてしまうという欠陥があります。なぜなら、亜麻布は綿のように染料を吸収しないからです」。

(2) 植民地への捺染亜麻布の輸出は、どの程度に植民地産綿花の輸入を意図したものだったのか、という点について

バルセロナで亜麻布捺染が始まったきっかけは、1760 年の法令が、1728 年の法令が輸入を禁止した外国産の綿布と捺染布を 20% の関税の支払いを条件に輸入解禁としたことにあった。とりわけアレーグラ社の史料等から分かった重要なことは、更紗製造業者たちは、この法令を受けて、外国産捺染亜麻織物と対抗するためにフランス産やオランダ産の上質白亜麻布の捺染を始めたということである。鈴木良隆氏も指摘するように、上質の亜麻布の質は当時の一般的なヨーロッパ産綿布の質よりもはるかに質が高かった。ちなみに、白亜麻布はスペインでは常に輸入が許可されていた。また、1768 年に外国産捺染布は再度輸入禁止となっている。

1760 年代の捺染亜麻布の生産量は僅かなものだったのに対し、1770 年代半ばになると捺染亜麻布の製造は急増する。これは、合衆国独立戦争の影響でイギリス産毛織物の輸入が途絶え、その代替品として、プラティエリヤスと呼ばれたシュレーゲン産の亜麻布の輸入が急増したためだった。プラティエリヤスの値段は、上記のフランス産上質亜麻布に比べればより手頃なものだった。販路に関しては、合衆国独立戦争までの捺染亜麻布は、ほとんどが国内市場で販売されていた。

ところが、合衆国独立戦争が終了した 1783 年以降、特に 84 年以降、捺染亜麻布は植民地に大量に輸出されるようになる。その理由は、1778 年に出された「自由貿易規則」によって、輸入品であっても国内で加工されたものについては、植民地への輸出に際して関税上国産品として扱われることになったこと、合衆国独立戦争が終了し、スペインと

の貿易が途絶えて物資が極めて不足していた植民地との貿易が再開され、植民地特需といえるような状況が生じたこと、(ただし 1786 年から数年間は特需の反動の不況期となった) 植民地の気候が亜麻布に適していたこと、そして、捺染亜麻布を輸出した対価として植民地産綿花が輸入されていたこと、などが挙げられる。

そして、最後の に関してだが、マルタ綿糸の独占的供給業者であるマルタ商人の支配を崩すためにバルセロナの更紗製造企業が共同で設立したバルセロナ紡績会社の史料(書簡)から、同紡績会社が、1784-85 年前後に植民地産綿花を輸入するために、会員企業の製造した捺染亜麻布を輸出していたことが分かった。つまり、捺染亜麻布が植民地へ大量に輸出されるようになった 1784 年以降のほぼ最初の段階から捺染亜麻布は綿花の購入を目的として植民地へ輸出されていたのである。また、1804 年にバルセロナ更紗製造企業が合同で王室に提出した請願書にも、1797 - 1801 年の対英戦争以前は、バルセロナから植民地のカタルトヘーナだけで、毎年 10 万反という大量の捺染亜麻布が植民地へ送られ、綿花の購入に当てられたことが明記されている。このように、捺染亜麻布の植民地への輸出は、綿花の輸入をはっきりと意図したものだったことは明白だといえる。

以上のことから、「ヨーロッパにとっての在来の古い物産」である亜麻布に、本来は更紗(捺染綿布)という「ヨーロッパにとっての新しい物産」に施されていた「新しい仕上げ技術」である「捺染」を施した商品である捺染亜麻布をスペイン領アメリカ植民地へ輸出して、「ヨーロッパにとっての新物産」である更紗の材料である綿花を輸入していたという解釈が成り立つといえる。

ただし、捺染亜麻布が国内でもかなり売られていたことは忘れてはならない。捺染亜麻布は、合衆国独立戦争が終了するまでは、専ら国内で販売されていたし、この戦争以後、特に 1784 年以降に捺染亜麻布が大量に植民地へ輸出されるようになってからも、実は少なからぬ量が国内で販売されていた。1789 年に実施された調査では少なくとも 30% が、また奥野がカスタニエー社の販売台帳で調べたところでは、同社の場合、ほぼ 80 年代を通して更紗を上回る量の捺染亜麻布が国内で販売されている。つまり、「古い物産」である亜麻布に、「新しい仕上げ技術」である捺染を施した捺染亜麻布は、植民地だけでなく、ヨーロッパ、あるいは少なくともスペインにおいても十分に魅力的な商品だったといえるだろう。種類と価格帯が幅広かったことも捺染亜麻布の更紗に対する強みだったと思われる。ただし、カスタニエー社の場合、90 年代に入ると、更紗の生産量が捺染亜麻布を上回っていく。

(3) マルタ綿糸への依存からの脱却は、そもそもなぜレヴァント綿ではなく植民地産綿花(アメリカ綿)である必要があったのか、という点について

マルタ綿糸とはレヴァント綿をマルタ島で紡いでマルタ商人によって供給されていた綿糸で、1717年と28年の法令で、輸入代替を意図して外国産綿製品の輸入が禁止された際、防疫上の理由やスペインとの歴史的繋がり等から、マルタ綿糸だけは輸入が許可された経緯があった。

マルタ商人がカタルーニャ産綿布の材料である綿糸の独占供給業者となっていたため、バルセローナの更紗製造業者はマルタ商人に対して、綿糸が太いにもかかわらず値段を吊り上げている、等々の不満を抱くことが少なくなかった。更紗製造業者が単独または共同で1760~70年代に綿糸のカタルーニャでの内製を試み始めるのは、このようなマルタ商人の独占を突き崩すためだった。そして、60~70年代では、恐らくは植民地産綿花供給が不十分だったこともあり、レヴァント綿花を用いた紡績も行われていた。

ところが、合衆国独立戦争が終わった1783年に更紗製造業者が共同出資してバルセローナ紡績会社を設立し、農村部で本格的に綿紡績が行われるようになって以降は、綿花は専ら植民地産綿花(アメリカ綿)が使われるようになった。もちろん、これには、植民地での綿花栽培が安定的に行われるようになったということもあるが、とはいえ、なぜレヴァント綿ではなく植民地産綿花でなければならなかったのか。

この問いを解く証言として奥野が見つけたことができた史料の中で最も重要かつ最も年代の早いものは、1797年に始まった対英戦争によりマルタ綿糸と植民地産綿花の双方の輸入が困難になった1798年に、当時バルセローナで最大規模の更紗製造業者だったゴニマにより書かれた書簡の中にある。ゴニマは、仕方なくレヴァント綿を使った結果として、次のように書きとめている。「手前どもがたくさん消費するのはアメリカ綿の方です。レヴァント綿は機械で紡績するには向きません。なぜなら、〔レヴァント綿の〕繊維が短く、汚く、重いからです。「こちらでも機械で紡績しておりますが、レヴァント綿はすべからず繊維が短く、紡績するのにとても苦労しますし、そのほとんどが埃となってしまいます」。このように、レヴァント綿は植民地産綿花(アメリカ綿)と比べて繊維が短く、機械での紡績に向いていないことが分かる。

ここでは、機械紡績の場合についてのアメリカの優位性(しかも圧倒的な)が語られている。ちなみに、カタルーニャには1784年にジェニー紡績機が、92年にアークライト水力紡績機が、1806年にミュール紡績機が導入されている。だが、植民地産綿花による紡績が本格的に始まった1780年代では、まだ紡

車による紡績が圧倒的に主流だったと思われるのだが、紡車での場合に限定した記述にはまだ遭遇できていない。

ただし、対英戦争終盤の1801年にバルセローナ紡績会社が王室に提出した陳情書には、「綿布や更紗を作るに際して、アメリカ〔植民地〕綿と王国(スペイン本国のこと)綿の質は、レヴァント綿とは比較にならないほど優れています。それゆえに、この原料(アメリカ綿のこと)は増加し普及することとなり、その売買と栽培が盛んになってきています」と、機械紡績に限定しないより一般的な記述がされている。ちなみに、ここでは、対英戦争の影響により、農村部ではやむなくレヴァント綿を用いた紡績が行われていることも書かれているが、その紡績のすべてが機械紡績だったとは考え難い。ともかく、以上の史料での記述から、長繊維であるアメリカ綿を使った紡車での紡績がレヴァント綿のそれよりも容易で綿糸の質もより高かったであろうことは容易に想像がつく。

もう一点、この史料から分かる重要な点は、対英戦争で植民地産綿花の輸入が困難になったことで、スペイン本国のモトリル(アンダルシーア)やアイピッサ島で行われるようになっていた綿花栽培で栽培されていた綿花は、アメリカ綿だったことが分かるということである。これは、他の類似の史料からも裏付けられる。

(4) まとめ

以上のことから、1780年代に成立したカタルーニャ綿業の流通生産構造では、「ヨーロッパにとっての在来の古い物産」である亜麻布に、本来は更紗(捺染綿布)という「ヨーロッパにとっての新物産」に施されていた「新しい仕上げ技術」である「捺染」を施した商品である捺染亜麻布がスペイン領アメリカ植民地へ輸出され、「ヨーロッパにとっての新物産」である更紗の材料である綿花を輸入されていた。そして、その綿花とは、「長繊維のアメリカ綿」という「ヨーロッパにとっての新しい材料」だったのであり、それによって、マルタ綿糸という「相対的に古い材料」からの脱却が達成されたといえる。また、「新しい仕上げ技術」が施された「古い物産」である捺染亜麻布は、1790年代まではスペイン国内でもかなり消費されていた。その消費が1790年代に減少していき、更紗の消費がさらに増えていったのは、恐らくは、長繊維のアメリカ綿が更紗の素材として中心となることで、カタルーニャ産更紗の質が向上したことと無縁ではないのではないかと思われる。

なお、ここに記した研究成果は、論文にして学会誌等にできるだけ速やかに投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

1. 奥野良知「カタルーニャの独立へ向けた『プロセス *procés*』の現状と経緯」『共生の文化研究』11号、2017年3月、48-72頁、査読なし。
2. 奥野良知「カタルーニャの独立派が構想する新国家の資源・エネルギー・環境問題」『共生の文化研究』10号、2016年3月、45-48頁、査読なし。
3. Yoshitomo Okuno, “The 1797-1814 slump and the adaption of the Catalan cotton industry”, 『愛知県立大学国際文化研究科論集』第17号、2016年3月、63-83頁、査読なし。
4. 奥野良知「カタルーニャでなぜ独立主義が高まっているのか？そして、カタルーニャでの独立主義の高まりは我々に何を提起しているのか？」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』第48号、2016年3月、27-59頁、査読なし。
5. Yoshitomo Okuno, “The 1797-1814 slump and the adaption of the Catalan cotton industry”, a paper presented at the XVIIITH World Economic History Congress, 2015.08.03-07, Kyoto, 京都国際会議場(京都市), pp. 1-23, 査読なし。
6. 奥野良知「カタルーニャにおける独立志向の高まりとその要因」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』第47号、2015年3月、129-166頁、査読なし。
7. 奥野良知「2013年の歴史学会 - 回顧と展望 - 近代南欧」『史学雑誌』123編第5号、2014年、355 - 358頁、査読あり。
8. 奥野良知「18世紀カタルーニャ綿業における『自由貿易』規則(1778年)以前の亜麻布捺染についての一考察」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』第46号、2014年3月、73-99頁、査読なし。

〔学会発表〕(計4件)

1. 奥野良知「カタルーニャの独立へ向けた『プロセス *procés*』の現状と経緯」京都イスパニア学研究会創設25周年記念大会での招待講演、2016年12月10日、キャンパスプラザ京都(京都市)。
2. 奥野良知「スペイン史上の18世紀」日本18世紀学会大会、2016年5月25日、愛知県立大学(愛知県長久手市)。
3. 奥野良知「近代南欧における綿業の地域的展開 - 18世紀カタルーニャ綿業の商品・市場・商人」経済地理学会中部支部12月例会、2015年12月20日、中京大学(名古屋市)。
4. Yoshitomo Okuno, “The 1797-1814 slump and the adaption of the Catalan cotton industry, at the XVIIITH World Economic History Congress, 2015.08.03-07, Kyoto,

京都国際会議場(京都市)

〔図書〕(計2件)

1. 奥野良知「自決を求めるカタルーニャの背景 - それは民族の相克か？」竹中克行編『グローバル化時代の文化の境界 - 多様性をマネジメントするヨーロッパの挑戦』昭和堂、2014年、1-232頁、奥野執筆部分は200-215頁。
2. 立石博高・奥野良知編『カタルーニャを知るための50章』明石書店、2013年11月、総頁数332、奥野執筆部分は、3-10、18-20、102、124-126、146、238、258-281、320-329頁。編集は奥野が一人で行ったので、全頁に渡り内容を監修するとともに、カタルーニャ語のカタカナ表記の統一もすべて奥野が行った。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

1. 奥野良知「カタルーニャの独立派が構想する新国家の資源・エネルギー・環境問題」環境と資源から見る国際社会：21世紀の世界と日本(愛知県立大学平成27年度公開講座)、2015年12月12日、愛知県立大学(愛知県長久手市)。
2. 奥野良知「カタルーニャにおける独立志向の高まりとその要因」世界史セミナー(愛知県立大学世界史研究会主催)、2015年10月31日、(愛知県立大学サテライトキャンパス(名古屋市))。
3. 奥野良知 TBS ラジオ「荻上チキ・Session-22」の「カタルーニャで何が起きているのか？」で解説(バルセロナより国際電話生出演)、2014年11月12日。
4. 奥野良知 NHK BS「キャッチ! 世界の視

点」の「独立目指すカタルーニャ 住民投票の波紋」で解説（スタジオ生出演）、2014年11月6日。

5. 奥野良知 東海テレビ「スーパーニュース」でカタルーニャの独立問題についての解説（バルセロナより国際電話での出演）、2014年9月26日。

6. 奥野良知 NHK BS「キャッチ 世界の視点」の「スペインTVE スペインで“クリミア・ショック”？」での解説（電話出演）、2014年3月31日。

7. 奥野良知 「国民国家とそこに包摂された諸民族体（ナショナリティーズ）」へのコメント（カタルーニャ研究の専門家として）、シンポジウム「カタルーニャを多元的に考える - 独立をめぐる想像力とリアリティ」、2014年3月20日、東京外国語大学（東京都府中市）。

8. 奥野良知 「総括 カタルーニャにおける自決運動の評価」、シンポジウム『現代の国際秩序におけるカタルーニャの自決運動』、2014年3月18日、大阪大学（大阪府豊中市）。

9. 奥野良知 「ナショナリズムの相克を超えて - カタルーニャの歴史的経験から - 」、グローバル化時代の文化の境界（愛知県立大学平成25年度公開講座）、2013年12月21日、愛知県立大学（愛知県長久手市）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥野 良知 (OKUNO, Yoshitomo)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：20347389

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()